

第2回 全体研究会

日 時：2014年5月9日（金）18：00～20：00

テーマ：「民国期医学界における『国医』の科学化をめぐる論争」

報告者：李 秉奎氏（北京大学医学人文研究院准教授）

司 会：高橋 伸夫（慶應義塾大学）

場 所：大学院校舎8階 東アジア研究所 共同研究室1

使用言語：中国語

「科学化」と「民族化」は1930年代の医学界における論争の二大テーマである。中国医学の廃止案の通過と「中央国医館」の設立は、そうした思想対立を象徴する事件となった。今回の報告者は医学者の論争のみではなく、当時中国社会・政治に広い影響を持つ文化人・知識人たちの主張にも着目し、国医の科学化をめぐる両者の対立は同時に近代化あるいは科学精神に立ち向かう中国伝統文化の窮地を反映していたと論じた。

余雲岫をはじめとする西洋医学者は、医学革命と「旧医」の完全廃止を主張し、「国医」の整理と国粋の保存を主張する中国医学者たちと激しく対立した。そのなかで、中医学の恩恵を受けていたにもかかわらず、胡適や梁啓超などの知識人はそれを公表せず、あくまで西洋医学を擁護していた。その理由は、自らが中医学の治療を受けたことが中国社会における西洋医学ひいては科学精神の拡散にとってマイナスになると危惧していたからである。一方で科学に対し懐疑的であり、中国医学を含めた中国の伝統文化は、中国が国際社会において尊敬される地位の獲得には不可欠だという考えも根強く存在する。そしてこの論争は結論を出せずに30年代の末に終息したが、現在はなおこのような論争が存在するのである。

質疑応答では今回のテーマを政治史的観点からさらに検討を深める価値があると提起された。そして報告者は、中国政府が90年代以降から主張する「中国の現代化」は西洋的な要素と中国の伝統の融合を目指すことであると論じた。この融合への期待は実に30年代の知識人から始まり、その努力・期待は新しい国家体制が国民を包摂する手段ともなったと分析を試みた。司会者からは法体系を含めて導入した明治政府の役割を対照に、日本における医学の近代化と中国のそれとの相違点を提示した。